

生き残ってくれてありがとう

なまひがし
中東 芽生

「あのころは大変やった。いつまでも平和であってほしいと思つとる。」

私のひいおばあちゃんは、太平洋戦争中の昭和二十年に、国民学校に入学した。登下校中、敵の爆けき機が飛んで来て爆だんを落とされたので、上級生に手を引っぱつてもらい麦畑にかくれた。家の中でも、空しゅう警報が鳴りひびくと電気を消して蔵に入る。決して安心出来る生活ではなかった。

家は幸い農家だったので、いもやしう油、みそ、麦ご飯を手作りし、都会の人ほど食料にはこまらなかつた。おやつは、ぐみの実やまきの実、いたどりなど自然物を口にしていた。「いも穴」という穴を家の中にほり、いもをためて遠くから買いに来た人に安く売っていた。多くはお金を持っていないので着物等と交かんしてほしいとたのまれたそうだ。

お父さんは戦死してしまつたが、終戦後は学校の行事等楽しい事もあつた。高校生の時、祖母が亡くなり残されたねたきりの祖父とろうあ(耳が聞こえない人)の母、小さい妹と一緒に生活しなくてはならなかつたのでたい学する事になつた。その後結こんし、農家を営み、今年で、築九十八年になる家を守つてきてくれた。

今の私には想像もつかない時代を生きぬいて来た、ひいおばあちゃん。私は今、ボランティアの人に見守ってもらい安全に登校しているが、戦争中は常に命の危険におびえていたと知り悲しくなつた。ひいおばあちゃんほどな思いで空を見上げていたんだろう。

ひいおばあちゃんは野菜作りが上手だ。農家をしていたので、戦争中も空腹にならず長生きにつながつてよかつた。また、家に遊びに行くとき必ず「野菜、持つて帰り。」や、「このおかしみんで分けよう。」とやさしい言葉をかけてくれる。戦争中、大阪から疎開してきた親せきに食料を分けてあげていた経験が、ひいおばあちゃんの思いやりにつながっているのかなと思つた。

「学校でも、友達と仲良くしいよ。小さな事でけどね、平和につながつとるんやで。」

という言葉を、わざわざ電話をして教えてくれた。やさしいだけではなく、大切な事を伝えてくれたり、間ちがつた時は正してくれるひいおばあちゃんが大好きだ。これからもたく山話をしたいので、ずっと長生きしてね。今まで辛い事も苦しい事もあつたと思うが、一生けん命生きてきてくれてありがとう。